

興來大澤野
爲其獨異
師承
于止
夫

漱石全集
十六卷

小

品

上

全三十四卷 第十五回配本

昭和三十一年十二月二十二日 第一刷發行 © 漱石全集 第十六卷
定價 一五〇圓

著 者 夏 目 漱 石

發行者 岩 波 雄 二 郎

印刷者 山 田 一 雄



發行所 東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三 株式會社 岩 波 書 店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・三水舎製本

目次

京に着ける夕

文鳥

夢十夜

永日小品

元日

蛇

泥棒

柿

火鉢

下宿

過去の匂ひ

七

一三

二八

五二

五二

五四

五七

六一

六四

六七

七〇

猫の墓

暖かい夢

印象

人間

山鳥

モナリサ

火事

霧

懸物

紀元節

儲口

行列

昔

聲

七三

七六

七九

八一

八四

八八

九〇

九二

九五

九七

九八

一〇〇

一〇二

一〇四

金

一〇六

心

一〇八

變化

一一一

クレイグ先生

一一三

長谷川君と余

一二一

滿韓とてころく

一二八

解説

一二九

注解

一四一

小

品

上

京に着ける夕

汽車は流星の疾きに、二百里の春を貫いて、行くわれを七條のプラツトフォームの上に振り落す。余が踵の堅き叩きに薄寒く響いたとき、黒きものは、黒き咽喉から火の粉をぱつと吐いて、暗い國へ轟と去つた。唯さへ京は淋しい所である。原に眞葛、川に加茂、山に比叡と愛宕と鞍馬、ことごとく昔の儘の原と川と山である。昔の儘の原と川と山の間にある、一條、二條、三條をつくして、九條に至つても十條に至つても、皆昔の儘である。數へて百條に至り、生きて千年に至るとも京は依然として淋しからう。此の淋しい京を、春寒の宵に、疾く走る汽車から會釋なく振り落された

余は、淋しいながら、寒いながら通らねばならぬ。南から北へ——町が盡きて、家が盡きて、燈が盡きる北の果迄通らねばならぬ。

「遠いよ」と主人が後から云ふ。「遠いぜ」と居士が前から云ふ。余は中の車に乗つて顫へてゐる。東京を立つ時は日本にこんな寒い所があるとは思はなかつた。昨日迄は擦れ合ふ身體から火花が出て、むく／＼と血管を無理に越す熱き血が、汗を吹いて總身に煮浸み出はせぬかと感じた。東京は左程に烈しい所である。此の刺激の強い都を去つて、突然と太古の京へ飛び下りた余は、恰も三伏の日に照り附けられた焼石が、緑の底に空を映さぬ暗い池へ、落ち込んだ様なものだ。余はしゆつと云ふ音と共に、倏忽とわれを去る熱氣が、靜なる京の夜に震動を起しはせぬかと心配した。

「遠いよ」と云つた人の車と、「遠いぜ」と云つた人の車と、顫へて居る余の車は長き轅を長く連ねて、狹

く細い路を北へ北へと行く。静かな夜を、聞かざるかと輪を鳴らして行く。鳴る音は狭き路を左右に遮られて、高く空に響く。かんからゝん、かんからゝん、と云ふ。石に逢へばかゝん、かゝらんと云ふ。陰氣な音ではない。然し寒い響である。風は北から吹く。

細い路を窮屈に兩側から仕切る家は悉く黒い。戸は残りなく鎖されてゐる。所々の軒下に大きな小田原提燈が見える。赤くぜんざいとかいてある。人氣のない軒下にぜんざいは抑も何を待ちつゝ、赤く染まつて居るのかしらん。春寒の夜を深み、加茂川の水さへ死ぬ頃を見計らつて桓武天皇の亡魂でも食ひに来る氣かも知れぬ。

桓武天皇の御宇に、ぜんざいが軒下に赤く染め抜かれてゐたかは、わかり易からぬ歴史上の疑問である。然し赤いぜんざいと京都とは到底離されない。離されない以上は千年の歴史を有する京都に千年の歴史を有

するぜんざいが無くてはならぬ。ぜんざいを召し給へる桓武天皇の昔はしらず、余とぜんざいと京都とは有史以前から深い因縁で互に結びつけられて居る。始めて京都に來たのは十五六年の昔である。その時は正岡子規と一所であつた。麩屋町の柵屋とか云ふ家へ着いて、子規と共に京都の夜を見物に出たとき、始めて余の目に映つたのは、此の赤いぜんざいの大提燈である。此の大提燈を見て、余は何故か是れが京都だなど感じたぎり、明治四十年の今日に至る迄決して動かない。ぜんざいは京都で、京都はぜんざいであるとは余が當時に受けた第一印象で又最後の印象である。子規は死んだ。余はいまだに、ぜんざいを食つた事がない。實はぜんざいの何物たるかをさへ辨へぬ。汁粉であるか煮小豆であるか眼前に髣髴する材料もないのに、あの赤い下品な肉太な字を見ると、京都を稻妻の迅かな閃きのうちに思ひ出す。同時に——ああ子規は死

んで仕舞つた。^{*}糸瓜の如く干枯びて死んで仕舞つた。

——提燈は未だに暗い軒下にぶら／＼してゐる。余は寒い首を縮めて京都を南から北へ抜ける。

車はかんから／＼に桓武天皇の亡魂を驚かし奉つて、しきりに馳ける。前なる居士は黙つて乗つて居る。後なる主人も言葉をかける氣色がない。車夫は只細長い通りを何處迄もかんから／＼と北へ走る。成程遠い。

遠い程風に當らねばならぬ。馳ける程顫へねばならぬ。余の膝掛と洋傘とは余が汽車から振り落されたとき居士が拾つて仕舞つた。洋傘は拾はれても雨が降らねば入らぬ。此の寒いのに膝掛を拾はれては東京を出るとき二十二圓五十錢を奮發した甲斐がない。

子規と來たときは斯様に寒くはなかつた。子規はセル、余はフランネルの制服を着て得意に人通りの多い所を歩行いた事を記憶してゐる。其の時子規はどこからか夏蜜柑を買うて來て、之を一つ食へと云つて余に

渡した。余は夏蜜柑の皮を剥いて、一房毎に裂いては

噛み、裂いては噛んで、あてどもなくさまようて居る

と、いつの間にやら幅一間位の小路に出た。此の小路

の左右に並ぶ家には門並方一尺許りの穴を戸にあけて

ある。さうして其の穴の中から、もし／＼と云ふ聲が

する。始めは偶然だと思つてゐたが行く程に、穴のあ

る程に、申し合せた様に、左右の穴からもし／＼と云

ふ。知らぬ顔をして行き過ぎると穴から手を出して捕

まへさうに烈しい呼び方をする。子規を顧みて何だと

聞くと妓樓だと答へた。余は夏蜜柑を食ひながら、目

分量で一間幅の道路を中央から等分して、其の等分し

た線の上を、綱渡りをする氣分で、不偏不黨に練つて

行つた。穴から手を出して制服の尻でも捕まへられて

は容易ならんと思つたからである。子規は笑つて居た。

膝掛をとられて顫へてゐる今の余を見たら、子規は又笑ふであらう。然し死んだものは笑ひたくても、顫へ

てゐるものは笑はれたくても、相談にはならん。

かんからゝんは長い橋の袂を左へ切れて長い橋を一つ渡つて、ほのかに見える白い河原を越えて、藁葺とも思はれる不揃な家の間を通り抜けて、梶棒を横に切つたと思つたら、四抱か五抱もある大樹の幾本となく提燈の火にうつる鼻先で、ぴたりと留まつた。寒い町を通り抜けて、よく／＼寒い所へ來たのである。遙なる頭の上に見上げる空は、枝の爲に遮られて、手の平程の奥に料峭たる星の影がきらりと光を放つた時、余は車を降りながら、元來何處へ寝るのだらうと考へた。

「是れが加茂の森だ」と主人が云ふ。「加茂の森がわれ／＼の庭だ」と居士が云ふ。大樹を繞ぐつて、逆に戻ると玄關に燈が見える。成程家があるなと氣がついた。

玄關に待つ野明さんは坊主頭である。臺所から首を

出した爺さんも坊主頭である。主人は哲學者である。居士は洪川和尚の會下である。さうして家は森の中にある。後は竹藪である。顫へながら飛び込んだ客は寒がりである。

子規と來て、ぜんざいと京都を同じものと思つたのはもう十五六年の昔になる。夏の夜の月圓きに乗じて、清水の堂を徘徊して、明かならぬ夜の色をゆかしきもの、様に、遠く眼を微茫の底に放つて、幾點の紅燈に夢の如く柔かなる空想を縦まゝに酔はしめたるは、制服の釦を眞鍮と知りつゝも、黄金と強ひたる時代である。眞鍮は眞鍮と悟つたとき、われ等は制服を捨て、赤裸の儘世の中へ飛び出した。子規は血を嘔いて新聞屋となる、余は尻を端折つて西國へ出奔する。御互の世は御互に物騒になつた。物騒の極子規はとう／＼骨になつた。其の骨も今は腐れつゝある。子規の骨が腐れつゝある今日に至つて、よもや、漱石が教師をやめ

て新聞屋にならうとは思はなかつたらう。漱石が教師をやめて、寒い京都へ遊びに來たと聞いたたら、圓山＊まるやまへ登つた時を思ひ出しはせぬかと云ふだらう。新聞屋になつて、糺＊たすもりの森の奥に、哲學者と、禪居士と、若い坊主頭と、古い坊主頭と、一所に、ひつそり閑かんと暮して居ると聞いたたら、それはと驚くだらう。矢つ張り氣取つてゐるんだと冷笑するかも知れぬ。子規は冷笑が好きな男であつた。

若い坊さんが「御湯に御這入り」と云ふ。主人と居士は余が顫へてゐるのを見兼ねて「公こう、まづ這入れ」と云ふ。加茂の水の透すき徹とほるなかに全身を浸ひけたときは齒の根が合はぬ位であつた。湯に入つて顫へたものは古往今來澤山あるまいと思ふ。湯から出たら「公先こうせんづ眠ねれ」と云ふ。若い坊さんが厚い蒲團を十二疊の部屋に擔かつぎ込む。「郡内＊ぐんないか」と聞いたたら「太織＊ふとお」だと答へた。「公こうの爲に新調したのだ」と説明がある上は安心

して、わがものと心得て、差支なしと考へた故、御免を蒙かうぶつて寝る。

寢心地は頗る嬉しかつたが、上に掛ける二枚も、下へ敷く二枚も、悉く蒲團なので肩のあたりへ糺たすもりの森の風がひやり／＼と吹いて來る。車に寒く、湯に寒く、果は蒲團に迄寒かつたのは心得ぬ。京都では袖のある夜着よぎはつくらぬものゝ由を主人から承うけたまはつて、京都はよく／＼人を寒がらせる所だと思ふ。

眞夜中頃に、枕頭まくらもとの違棚に据ゑてある、四角の紫檀したん製の棹せうに嵌め込まれた十八世紀の置時計が、チーンと銀碗ぎんわんを象牙ざうげの箸で打つ様な音を立てゝ鳴つた。夢のうち此の響を聞いて、はつと眼を醒ましたら、時計はとくに鳴り已やんだが、頭のなかはまだ鳴つてゐる。しかも其の鳴りかたが、次第に細く、次第に遠く、次第に濃こまかに、耳から、耳の奥へ、耳の奥から、腦なのなかへ、腦なのなかへ、心の底へ浸しみ渡わたつて、心の底から、

心のつながる所で、しかも心の尾いて行く事の出来ぬ、
遐かなる國へ抜け出して行く様に思はれた。此涼しき
鈴の音が、わが肉體を貫いて、わが心を透して無限の
幽境に赴くからは、身も魂も氷盤の如く清く、雪甌の
如く冷かでなくてはならぬ。太織の夜具のなかなる余
は愈寒かつた。

暁は高い櫓の梢に鳴く鳥で再度の夢を破られた。此
の鳥はかあとは鳴かぬ。きやけえ、くうと曲折して鳴
く。單純なる鳥ではない。への字鳥、くの字鳥である。
加茂の明神がかく鳴かしめて、うき我れをいと寒が
らしめ玉ふの神意かも知れぬ。

かくして太織の蒲團を離れたる余は、顫へつゝ窓を
開けば、依稀たる細雨は、濃かに糺の森を罩めて、糺
の森はわが家を遶りて、わが家の寂然たる十二疊は、
われを封じて、余は幾重ともなく寒いものに取り圍ま
れてゐた。

春寒の社頭に鶴を夢みけり

明治四〇、四、九——一

文鳥

十月早稻田に移る。伽藍がらんの様な書齋に只一人、片附かけた顔を頰杖で支へて居ると、三重吉みへきちが来て、鳥を御飼かひなさいと云ふ。飼つてもいゝと答へた。然し念の爲だから、何を飼ふのかねと聞いたら、文鳥ぶんてうですと云ふ返事であつた。

文鳥ぶんてうは三重吉みへきちの小説に出て来る位だから奇麗な鳥に違なからうと思つて、ぢや買つて呉れ玉へと頼んだ。所が三重吉は是非御飼ひなさいと、同じ様な事を繰り返してゐる。うむ買ふよゝゝと矢張り頰杖を突いた儘で、むにやゝ云つてゐるうちに三重吉は黙つて仕舞つた。大方頰杖に愛想を盡かしたんだらうと、此時始め

て氣が附いた。

すると三分ばかりして、今度は籠を御買ひなさいと云ひだした。是れも宜しいと答へると、是非御買ひなさいと念を押す代りに、鳥籠の講釋を始めた。其の講釋は大分込み入つたものであつたが、氣の毒な事に、みんな忘れて仕舞つた。只好いのは二十圓位すると云ふ段になつて、急にそんな高價たかいのでなくつても善からうと云つて置いた。三重吉はにやゝして居る。

夫それから全體何所で買ふのかと聞いて見ると、なに何所の鳥屋にでもありますと、實に平凡な答をした。籠はと聞き返すと、籠ですか、籠はその何ですよ、なに何所にかあるでせう、と丸まるで雲を攫つかむ様な寛大な事を云ふ。でも君あてがなくつちや不可いけなからうと、恰あたも不可いけない様な顔をして見せたら、三重吉は頰ほぺたへ手を宛あてゝ、何でも駒込に籠の名人があるさうですが、年寄ださうですから、もう死んだかも知れませんか、

非常に心細くなつて仕舞つた。

何しろ言ひだしたものに責任を負はせるのは當然の事だから、早速萬事を三重吉に依頼する事にした。すると、すぐ金を出せと云ふ。金は慥に出した。三重吉はどこで買つたか、七子の三つ折の紙人を懷中してゐて、人の金でも自分の金でも悉皆此の紙入の中に入れて癖がある。自分は三重吉が五圓札を慥に此の紙入の底へ押し込んだのを目撃した。

斯様にして金は慥に三重吉の手に落した。然し鳥と籠とは容易にやつて來ない。

其のうち秋が小春になつた。三重吉は度々來る。よく女の話などをして歸つて行く。文鳥と籠の講釋は全く出ない。硝子戸を透して五尺の縁側には日が好く當る。どうせ文鳥を飼ふなら、こんな暖かい季節に、此の縁側へ鳥籠を据ゑてやつたら、文鳥も定めし鳴き善からうと思ふ位であつた。

三重吉の小説によると、文鳥は千代々々と鳴くさうである。其の鳴き聲が大分氣に入つたと見えて、三重吉は千代々々を何度となく使つてゐる。或は千代と云ふ女に惚れて居た事があるのかも知れない。然し常人は一向そんな事を云はない。自分も聞いて見ない。只縁側に日が善く當る。さうして文鳥が鳴かない。

そのうち霜が降り出した。自分は毎日伽藍の様な書齋に、寒い顔を片附けて見たり、取亂して見たり、頬杖を突いたり已めたりして暮してゐた。戸は二重に締め切つた。火鉢に炭ばかり繼いでゐる。文鳥は遂に忘れた。

所へ三重吉が門口から威勢よく這入つて來た。時は宵の口であつた。寒いから火鉢の上へ胸から上を翳して、浮かぬ顔をわざとほてらして居たのが、急に陽氣になつた。三重吉は豐隆を従へてゐる。豐隆はいゝ迷惑である。二人が籠を一つ宛持つてゐる。其の上に三